「会社」論その後

馬　場　宏　二

「会社」を表題に含む文章を三つ書いてみた[1)]。そのうち，会社なる語の由来について最も詳しいのは，最新の『「会社」の探究』であり，これで，私なりに従来の理解を多少進めたつもりだった。ところが刊行後まもなく，それが不完全であることが苦になり出した。研究に完全なものはないとかシロウト芸だから不完全なのは当然だとかの，一般的な意味で言うのではない。私自身，全く未経験なこの道で，能力が低いことは致し方ないとして，低い能力なりの範囲でも史料的にもう少し詰め得たところがあり，詰めの不足による欠陥や誤りが残っていることが見えてきたのである。誤りについては取り急ぎ訂正する途を講じねばならず，併せて欠陥を多少なりと埋めたい。とりあえず，今の時点での知識による一文を草しておくことにする。

A. 和蘭宝函

これは，幕府が取り寄せて所蔵していた，『オランダ雑誌』*Nederlandsch Magazijn*の和名である。その現物を，『「会社」の探究』が出版された後にやっと目にすることが出来た。そのため，記述の，量的には極く一部だが内容上は決して小さくない一部を，訂正する必要が生じた。この雑誌は，幕末史や蘭学史の専門家には周知のものだから，私ごときが改めて紹介を試みるまでもないのだが,「会社」語原論の補足訂正に必要な限りでは，書誌学的側面にも触れておかねばなるまい。

A-1 *Nederlandsch Magazijn*

19世紀に入ると幕府はオランダからこの雑誌を取り寄せ，文化八（1811）年創立の，天文台所属蕃書和解御用で保持していたが[2)]，黒船襲来後の安政２（1855）年に蕃書調所が創立されると，そちらへ移管した。ここで『和蘭宝函』と名付けられたようである。維新後これは内務省，農商務省を経て帝国博物館に移管され，現在東京国立博物館が持っている。それには，蕃書調所，内務省，農商務省，帝国博物館と四つの蔵書印が押してあり，内務省では「荷蘭宝函」と書いていたのを農商務省時代に「和蘭宝函」と改めた様子がうかがえる。

『オランダ雑誌』は30×20センチの大版の大衆雑誌で，アムステルダムのディーデリクス兄弟社刊。原型は各冊30ページ余りの月刊誌のようだ（傷み易くなっているので，全巻全頁を広げて確認するのを憚った）が,『和蘭宝函』としては年毎に巻（函）として纏められており，各巻とも

正確に416ページである。1834年から1856年まで所蔵されており，1834～1845年の12巻は*Nederlandsch Magazijn*であるのに，1846年から，名称が*Nieuw Nederlandsch Magazijn*と変わり，この名称で，二年分の重複を含む13巻で1856年に至る[3]。編集は細部では多少変化しているが，雑誌としての基本的な性格はさほど変わったようには見えない。

内容ははなはだ多様である。風俗，身辺雑記，珍しい話題，歴史，科学，地誌，芸術等々。主題は世界各地に亙り，ギリシャ・ローマ時代もあれば直近の出来事もある。日本の紹介が絵入りで書かれている記事もある。学術誌や専門誌ではなく，大衆啓蒙的雑学誌である。

この雑誌は幕府時代には有用な海外情報源として取り寄せられていたものであろう。どの程度読まれたか私には解からないが，茶渓古賀増（謹一郎）がこれを漢訳し寸評を加えたのが『度日閑言』であり，これに「会社」なる語が出てくる。この訳本は「会社」の初期の出現例のひとつであり，中でも一書で最多回出現した例である。『和蘭宝函』が読まれ訳された例は他にもあるらしいが，私が『和蘭宝函』を見たくなったもともとの契機は，『度日閑言』における「会社」の，都合38回にも及ぶ出現である。

但し，『度日閑言』と『和蘭宝函』をすぐ照合して見るつもりには全くなれなかった。『度日閑言』は国会図書館所蔵の稿本で計2500ページに及ぶ大冊，『和蘭宝函』の方は当初は所在も掴めずにいた。解かってみれば東京国立博物館で総計1万ページに近いものだから，双方を並べて対照することは結局出来ない。しかも漢文と蘭文で，私にはどちらも文章としては読めず，せいぜい読める単語を拾い出すていどである。

もっとも，杉田玄瑞『地学正宗』の場合は，「会社」の原語に関する限り，原書のP. J. Prinsen, *Geographische Oeffeningen*と照合し，それなりの成果を挙げたつもりだった。しかし『地学正宗』はコピーを手許に置けたし，そこから詳しいメモを取って国会図書館所蔵の*Geographische Oeffeningen*と照合することはそう難しくなく，量的にもさほどではないし，訳分は漢文そのものというより漢文基調の仮名交じり文なので結構読める。都合18の「会社」を照合して，13までは原語がMaatschappijかGenootschapであることは一日で突き止め得た。後で多少考えて，他の原語も4つまでは特定出来た[4]。

だが，『度日閑言』と『和蘭宝函』*Nederlandsch Magazijn*の間ではそうは行かないことは初めから解かっている［しかも実際，後に偶然照合できた場合，instelling（設立，調節，団体，心構え）も「会社」と訳されているのに気付いた[5]ので，この分では原語はかなり多様であろうと思われる。それをいちいち照合するとなると，『和蘭宝函』が相当に傷んでいるから，技術的にも極めて難しいことになる］。

そこで『度日閑言』の「会社」については，まず推理に頼ることにした。文脈上，一般社会を指す意味で「会社」と記している場合と，仲間とかグループとかの不定形集団，もしくは何らかの意味で組織化された集団を「会社」と記している場合が多い。この二様の多数例については，とりあえず当時創案された和製漢語である「会社」の意味が解かればよいとして，原語の推測や照合は試みないことにした。

照合せずとも原語が推測可能な事例もあった。単独で「コンパクニー」と仮名書きした場合が二つほどあったが，当然Compagnieであろう。だがそれは営利企業ではなく，明らかに軍事組織を指していた。今日なら「中隊」となる用例である。「会社」に「ソシエテイト」と仮名が振ってあったのもあり，Sociëteitだろうが，意味上は「協会」であった。

「会社」が直截に営利企業の意味で用いられている例はほとんど見当たらなかった。但し，国策特権会社を「会社」と記した例が二群見つかった。一つはコルベールの伝記の記事で，「督進東西両印度会社」とあった。これはもとがフランスのCompagnies des Indesであることは間違いないから，オランダ語でもCompagnieと書かれているに違いない。もう一つは「公司東印土会社」と書いてあるオランダ自身の組織で，これはOostindische Compagnieに違いない。この記事には「会社」が多数回用いられているが，いずれも東インド会社に関わっている。だから，この二群を一括して，Compagnieがやや特殊な営利企業の意味で「会社」となる例もある，と判断した[6)]。今にして思えば，これが即断で，誤りのもとだった。

A-2　CompagnieとHandelmaatschappij

幸運なことに，この二つの「インド会社」の原語を，比較的容易に探し出せそうな手掛かりがあった。そこで『和蘭宝函』の所在を国会図書館に問い合わせたところ東京国立博物館であることが解かり，1999年10月，閲覧に出かけた。親切に対応してくれたが，この時見せてもらった現物は皆，1940年代，50年代の諸巻で，実は『新オランダ雑誌』*Nieuw Nederlandsch Magazijn*である。インド会社の記事が在るはずの1830年代の巻は含まれていなかった。一度は館員に確かめたのだが，尋ねた相手がたまたま知識の少ない人だったと見えて，『和蘭宝函』はこれで全部ですと言うので，そうなのだろうと思い込み，校正中だった『「会社」の探究』の原稿の『オランダ雑誌』を『新オランダ雑誌』に，*Nederlandsch Magazijn*を*Nieuw Nederlandsch Magazijn*に変えてしまった[7)]。まもなく『「会社」の探究』は出版された。

その後なお心残りだったので，今はオランダ会計史を御研究の茂木虎雄氏に伺って，日蘭学会の所在を知り，問い合わせて見た。金井円先生が，『和蘭宝函』は東京国立博物館に1830年代から全部あるはずだと教えてくださった。その知識を持って当たり直して見ると，確かにその通りで，2000年の２月にはやっと全貌に触れることが出来た。シロウトがあやふやな知識で物事に当たると，まことに余計な手間がかかるものである。

さて，『オランダ雑誌』*Nederlandsch Magazijn*各巻には，巻頭に通年索引が付いている。これを頼りに探すと，「コルベール」は記事の見出しになっているのですぐ見つかった。ただし，『度日閑言』に記してあった1834年の巻ではなく1835年の巻である。驚いたのは，てっきりあるに違いないと思っていたCompagnieが無く，代わりにHandelmaatschappijと書いてあったことである[8)]。直訳すればこれこそ「商社」であり，手許の『オランダ語辞典』にも「商社」と出ている。

もう一つの「公司東印土会社」の記事は索引では見出せなかった。しかし『度日閑言』に，「函千八百三十五年　八十六，七頁」と出所が明記してある。それに頼って改めて原書の該当箇所を

見ると，ここの見出しは「今週の回顧」である。この記事は，月毎の諸号の中に，ほぼ各週一回になるように，歴史的記念日を取り上げているシリーズだが，1835年3月号の三週目の回顧の筆頭に，1602年3月20日に東インド会社が出来た，とある[10]。「公司東印土会社」の見出しは訳者古賀茶渓が付けたものであり，索引に出てくるはずがなかった。

さてこの東インド会社誕生の記事の中に，都合11の「会社」および該当語が出て来る。『度日閑言』中で「会社」がもっとも集中した箇所である。いずれも，オランダ東インド会社そのものか，その構成要素になった諸先駆会社を指している。ところでその原語は，冒頭一句の「東インド会社」がOost-Indische kompagnieであるだけで，文中の「東インド会社」がすでにOost-Indische maatschappijであり，その他『オランダ雑誌』半ページほどの記事の中にある都合九つの「会社」も，八つまではmaatschappijである。最後の一つだけcompagnieと書かれている。つまりこの記事では，歴史的固有名詞であるCompagnieが，わずかにその痕跡を残しながら，Handelmaatschappijでなく単にMaatschappijと言い換えられているのである。ここの「会社」がこのMaatschappijの訳語だとすると，それには，共同出資の営利企業という，今日の「会社」の意味がかなり含まれることになる。

これに加えて，『和蘭宝函』の別の巻の記事で，オランダ東インド会社が，Oost Indische Handelmaatschappijと呼ばれていることに，かなり偶然に気付いた[9]。この特権会社の原名は，最もものもの書けば，De Vereenighde Nederlandsche Geoctroyeerd. Oost-Indische Compagnieになるはずであり，通常V. O. C.と略記されていた。その歴史的固有名詞としての「会社」*Compagnie*が，当然のようにHandelmaatschappijと呼ばれている。行論のために，これは注目に値する。

『度日閑言』では「公司」を，訳者古賀の自作題を含めて三回は使っていた。この方は原語が特定出来そうにない。これは訳者が説明の便宜のために加えたものかも知れない。この「公司」は，清朝でcompanhiaの音訳として作られ，後にcompanyの訳語として扱われた「公斑衙」に由来するようだが，日本の「会社」よりやや早く成立し，共同出資企業の意味をヨリ強く示すと見られる。それを漢学者古賀茶渓が導入して，もともと営利企業の意味が含まれない，蘭学者の「会社」を補ったのではなかろうか。

不十分ながら『度日閑言』と『和蘭宝函』を照合してみた結果，歴史的にCompagnieと名乗っていた組織が，1830年代にはmaatschappijあるいはHandelmaatschappijと呼び変えられていたことが判った。それは当然「会社」の意味変換にも「商社」の登場にも関わってくる。今度はこの方も考えて見なければならない[11]。

幸いオランダ経済史の専門家，石坂昭雄氏が，『「会社」の探究』への私的なコメントとして，オランダではもともとイタリア語のCompagniaに由来するCompagnieを使っていたのが，ナポレオン法典の影響で*Société*を用いるように変わり，しかもナショナリズムのせいでそのまま*Société*とはならず，いわば地元言葉のMaatschappijになったのだと，教えてくださっていた。となれば，話はかなり明瞭になる。もともとCompagnieと名乗ってきた国策的特権通商組織が，組織としてはすでに解体しており，他方商法上の用語がCompagnieからMaatschappijに変わったこともあって，

Maatschappijと呼び変えられた。それも単なる団体とか協会とかの一般的組織でなく，営利目的に限定された組織の意味を明示するためにHandelを付けた，と推測出来る。つまり，Oostindische Handelmaatschappijは，歴史用語としては不正確なのだが，それが書かれた19世紀初頭の日常用語として普通に用いられていたのではないか。

こう断定してしまうには，史料探索がいささか少な過ぎる。だが，今の私の能力では，これが目一杯である。他方，話の辻褄は極めて良く合う。そこで，もしこれがシロウトなりの仮説として認められれば，そこからさらに進んで，このHandelmaatschappijが，幕末の実務官僚が使い出した「商社」の語原だったのではないか，という，次なる仮説が成立する。

ただし，この後の方の仮説については，今のところ状況証拠以外の根拠は挙げられない。石井孝によれば，幕府の実務官僚が「商社」を使い始めたのは萬延元年（1860年）で[12]，同年夏に勘定奉行と外国奉行がオランダ人に「商社」の仕組みを問うた場合と，年末に長崎奉行が商人に「商社」を作らせようと建言した場合と二例挙げられる。日本では認知されていなかった共同出資の営利企業の概念を得るのに欧米の概念を借りたとすれば，まずは最も身近なオランダから学んだであろう。或いは官僚自身通辞出身か蘭学を学んだ人だったかも知れない。今の石井説はそうした推測の根拠にはなる。接触相手のオランダ人が当時Handelmaatschappijを用いていたとすれば，すでに蘭学者たちがMaatschappijを仲間・集団の意味で「会社」と訳していたことでもあるから，直訳で「商社」とすることは極めてありそうなことである。以上が「次なる仮説」の状況証拠である。

だが，これについては，今のところ物証がない。少なくとも私には挙げられない。そればかりか，逆の証拠とも解され兼ねない文書はあり，また「商社」の語原としては，別筋の小栗忠順についても考えておかねばならない。

その文書とは『外務省引継文書』の中の「孛国グレセル商社ヨリ鹿島屋ニ係ル産卵紙ノ売買…」というもので[13]，慶応元年（1865年）提出だから「商社」の初期の用例であるが，この「商社」の原語はHandelmaatschappijではない。プロイセン領事が幕府に提出した蘭文の手紙に和訳文がついており，表題の「商社」は和訳文では「商家グレセル仲間」である。表題には赤字で「旧記」と添書きされているが，手紙を受け取った時すぐに「商社」と書いたかどうかは解からない。しかも原文では，「グレセル仲間」は，Handelhuis Grœsser …であり，私に判読出来た限りでは，この…はGrœsser & C?である。なにしろ読めない外国語の手書きを読もうというのだから，判読自体がはなはだ心許ないが，「仲間」と訳された部分がHandelmaatschappijでないことは確かであり，compagnieに当たる語の（何語か判定出来ないが），英語なら○○○& Co.のCo.に当る省略記号であることは間違いない。

とすると，1860年代でも企業名としてcompagnieが当然のように使われていたことになりそうだが，これもそうとも断定しきれない。& Co.に当たる記号を用いながらHandelmaatschappijと読んでいたのかも知れず，あるいはドイツ領事が幕府相手なので不馴れなオランダ語を書いた際に国際的に共通の略語を使ったのかも知れない。いずれにしろこのあたりは，私の学力不足で明快な

判断は下せない。

もう一つの小栗忠順の筋はこうなる。幕府の遣米使節団の目付として小栗が世界一周したのは同じ1860年だが，彼がこの旅で「商社」の概念を得たことは大いにありそうなことである。ことにパナマの山越えで日本要人としては初めて鉄道に乗っており，この時商社やらコンペニーやらの概念を得たとする説も，不確かながらある。そうなら，小栗は蘭学を学んでいないはずだから，「商社」の原語は英語のCompanyになるだろう。彼が帰国後すぐ「商社」の概念を押し広めたかどうかは解からないが，帰国は同年秋だから，広めたとしても日本最初の商社とは言えず，Handelmaatschappij由来の「商社」が一歩先に普及し始めていたと考えられる。ただ，小栗が「商社」なる語の最大の普及推進者となったことは疑いない。元治元年（1864年）以後彼がフランス公使ロッシュと接触する中で「商社」に当たる概念を多用せざるを得なかったことは確実であり，そうならこの際の原語はフランス語のCompagnieだったのではなかろうか。彼の傍らに，フランス語を解する鋤雲栗本瀬兵衛がいたからである。そうした経験の後に，小栗は他の勘定奉行を主導して，1867年に，有名な商社設立の献策を提出する。これが兵庫商社の設立に連なり，小栗は「商社」の創案者ないし翻訳者と目されるに至るのだが，この献策にある「商社（西名コンペニー）」の原語は，音からすれば多分，フランス語やオランダ語のCompagnieではなく，英語Companyなのであろう。そうならオランダ語のHandelmaatschappijは，「商社」の原語として最初ではあったが，わずかな期間わずかな範囲で機能しただけで役割を終えたことになる。

とはいえ，そもそもHandelmaatschappijを「商社」と訳した物証を私はまだ目にしておらず，また『「会社」の探究』で繰り返しておいたように，小栗については史料が極めて乏しい。シロウトとしては，問題を一通り整理できれば満足するしかない。小栗流と逆に極度に歯切れの悪い叙述になったが，今のところこれ以上には進められない。

B. ウォールデンブック

いわゆるハルマ(「波留麻」等の宛字がある）辞典の邦訳は，蘭学の一成果であり，またその促進剤でもあった。『「会社」の探究』では，いわゆる『ズーフ・ハルマ』と，その校訂版である『和蘭字彙』双方の訳語を参照したが，その後，せっかくだからと，原書および江戸ハルマも当たってみた。これはこれで「会社」の語原探究にいささかの効用があることが解かった。

B-1　ハルマの流れ

大まかにいえば，幕末には蘭和辞典が都合二流四点刊行されているが，底本はいずれも，いわゆるハルマのウォールデンブックである。まずその書名を示しておくと；－

Woordenboek der Nederduitsche en Fransche Taalen, door FranÇois Halma, Te Amsterdam by de Westens en Smith, Te Utrecht by Jacob an Polsum, 1729

編者兼発行者名は「フランソア・アルマ」かもしれないが，習慣に従って「ハルマ」と呼んで

おく。書名を和風に文字を拾って読むと「ウォールデンブック」になる。辞書のことで，つまり蘭仏辞典である。

日蘭学会作成の目録によると，日本にはこの辞典は旧幕府所蔵本三点（二，三，四版）があるが，他に東大総合図書館所蔵本（二版）があり，私はこれを見ることが出来た。上記書名はこの東大本による。杉本つとむ氏によれば，この1729年刊の第二版が『ズーフ・ハルマ』，『ハルマ和解』双方の底本である。

因みに，同じ企画による仏蘭辞典もある。こちらは幕府所蔵本二点（1761年刊と1781年刊）の他に東大本がある。東大本を見ることが出来たので，その書名を挙げておく：－

Grand Dictionnaire François et Flaman, de François Halma, Amsterdam chez les Westens & Smith, Utrecht chez Jacob van Poolsum, 1733

これはおそらく四版である。初版1686年発行，二版1708年，三版1717年の記述がある。

蘭仏辞典，仏蘭辞典，いずれもフランス語を学ぶオランダ人のための辞書と言って良いようである。蘭仏辞典の方は初版年次の記述がないが，仏蘭辞典より後で出版されたものと思われる。いずれも18世紀のうちに日本に持ち込まれていた。

さて，蘭学史の専門家には周知のことだろうが，上記蘭仏辞典から，邦訳によってまず『波留麻和解』別名「江戸ハルマ」が，通辞石井恒右衛門に依拠しつつ稲村三伯を中心に宇田川玄真，三伯の師大槻玄沢ら蘭学者の手で作りだされた[14]。寛政八（1796）年のことだと言う。これは三十部しか作らず，あまり活用されなかったそうだが，その要約・普及版が三伯の門人藤林普山の手で，文化七（1810）年に『訳鍵』として出版された。他方，長崎のオランダ商館長ヘンドリック・ドゥーフ（H. Doef）が通辞を動員しながら訳出したのが『ズーフ・ハルマ（道富波留麻）』別名「長崎ハルマ」で，文化十三（1816）年に成立したが，おそらくドゥーフの帰国もあって容易に完結せず，途中で幕府の督促を受けて完結したのは天保四（1833）年であった[15]。これ自身大いに活用され筆写された模様であるが，それがさらに桂川七第目甫周（国興）の手で校訂され，1855～58年に『和蘭字彙』として出版される。そしてそれがまた，文久二（1862）年刊の『英和対訳袖珍辞書』の下敷きなったという。

こうして江戸時代の蘭和辞典の底本は，いずれにせよHALMAの蘭仏辞典だったが，これは，オランダ語の単語をオランダ語で説明し，それと同義のフランス語の説明を付けたものだから，実は蘭蘭仏辞典である。訳者が必ずしもフランス語をコナせなくとも邦訳出来たわけである。仏蘭辞典の方も同様で，フランス語の単語をフランス語で説明した後，同義のオランダ語の説明をつけている，仏仏蘭辞典である。

「ハルマ」原書の東大所蔵本は，蘭仏辞典，仏蘭辞典とも羊皮で装丁した一冊本である。ともに，26×19㎝，前者が1,500ページ，後者が1,088ページの大型の辞典である。いずれも幕府所蔵だった本ではなく，後に購入した由。

「ハルマ」の和訳のうち，『ハルマ和解』『ズーフ・ハルマ』とも東大総合図書館の所蔵本を見ることが出来た。『ハルマ和解』は装丁・文字とも極めて奇麗だが，訳語は決して良くはない。例文

が省略されてしまっている他，品詞の概念が十分掴めていなかったらしく，訳語の名詞形・形容詞形・動詞形が混同されている，等の弱点がすぐに見える。これに比べると『ズーフ・ハルマ』は辞書としての出来ははるかに良いが，蘭学生がアルバイトに筆写することが流行っていたらしく[16]，たぶん東大本もその一つなのであろう，文字や装丁は良くはないし，全巻揃っていないようにも見える。因にこれの校訂版だという『和蘭字彙』は杉本つとむ氏の解説付きで1974年に復刻されているから，こちらはあちこちの大学図書館で見ることが出来る。ただ，『ズーフ・ハルマ』と比べると，訳語はかなり同じであり，変わった場合でも必ずしも改善になっているとは限らない。『ハルマ和解』の要約・普及版である『訳鍵』は見たことがないが，出来の良い辞書ではないと言われているから，この際は無視して良かろう。

B-2 「商人会社」のルーツ

『「会社」の探究』の中で，福沢諭吉『西洋事情』の中の「商人会社」なる表現について，ある種の推測を試みた。「商社」が福沢の「商人会社」の短縮だという俗説が意外に多いので，そうではありそうにないとする指摘を叙述の中心にしたが，「商人会社」なる語の由来自体については，『ズーフ・ハルマ』のCOMPAGNIEなる単語の説明にある，Maatschappij van cooplieden に求められるのではないか，と推理しておいた。福沢が齋々適塾で，繰り返し『ズーフ・ハルマ』を引き，また蘭学生アルバイトとしてこれを筆写したから，いわばインプリントされていたろうと言うのが推測の根拠だった。

さて，そのさらにルーツとなると，ハルマの蘭仏辞典（上記のウォールデンブック）に求められることになるが，それにはこうある；－

COMPAGNIE

－bende van kriigsvolk

－compagnie de gen de guerre

（兵隊の集団－中隊－の意味――引用者）

Compagnie,

－Maatschappy van cooplieden

－compagnie, société de marchands

（商人の会社の意味――引用者）

de Compagnie van Oost en West Indien

la compagnie des Indes Orientales et Occidentales

（東および西インド会社の意味――引用者）

明らかに，Maatschappij van cooplieden は，底本となった「ハルマ」の『ウォールデンブック』に含まれていた。

『ズーフ・ハルマ』では，Compagnieはまず「軍兵の一隊 九百人をいふ」と訳され，続くMaatschappij van cooplieden は「舫ひ商売」と名訳されている。de Compagnie van Oost en West Indien

は「東印度又西印度にある欧羅巴の商館」である。

これに対して『ハルマ和解』では語の説明が極度に単純で，Compagnieは単に「軍兵ノ集ル」である。Maatschappij van cooplieden(ママ)は原語も訳語も無い。Compagnie van Oost en West Indienも，同様に原語，訳語とも無い。

因に『ズーフ・ハルマ』ではGenootschapが「学会」, Maatschappijが「組合」, Oost Indie Maatschappijが「東印度係りの組合」であるのに対して，『ハルマ和解』ではgenootschapが「集リ交ル」(ママ), Maatschappeyeが「火伴ノ会集」である。つまり，『ズーフ・ハルマ』は共同営利企業の概念を持った翻訳であるのに対して，それより20年早い，学者だけの翻訳である『ハルマ和解』には，共同営利企業の概念がなかった。この差はあるいは政治の中心江戸と貿易の中心長崎の差かもしれないが，いずれにせよ『ハルマ和解』は，せっかく原書にあった，Maatschappij van cooplieden(ママ)を訳さなかった。むしろ訳せなかったのであろう。上記引用の他の訳語からも,『ハルマ和解』に共同営利企業の概念がなかったことは推測出来る。

『和蘭字彙』は『「会社」の探究』に引いておいた通り[17]，CompagnieとMaatschappijに関わる訳語は『ズーフ・ハルマ』のままである。ただGenootschapが「学会」であったのが「寄合又集会」と変わっている。校訂によって改善されたという説もあるが，われわれの関心事に関する限り，たいした改善ではない。

C. 残る問題

今のところ私にはこれ以上のことは言えない。しかし，可能ならば埋めておきたい欠陥はいくつか拾い出せる。例えば,「会社」なる語の初見は，杉田玄瑞『地学正宗』であるが，語の創案者が玄瑞だったかどうかは，まだ確定できない。もっとも，この点が解からなくとも，当面困る事情があるわけではない。だが,「商社」の創案過程については，史料的に可能ならば，もう少し掘り下げておきたい。

そもそも「商社」なる語の使用例をもう少し見ておかねばならない。その上で，これが専ら業種つまり大規模な貿易企業を指していたのか，企業形態つまり共同出資企業一般を含意していたのか，またその原語がオランダ語のHandelmaatschappijなのかCompagnieなのか，英語のCompanyなのか，またはフランス語のCompagnieを含むのか，さらに，当時すでに存在した，共同企業を意味する和語,「組合ひ」,「仲間」,「舫ひ商売」といった和語と交錯したのか，しないままに文語あるいは和製漢語に留まったのか。これらは，可能な限り詰めておきたい。それは単なる物数奇の穿鑿を越える効用を持つ可能性がある。

そして何よりも，明治政府が，何故，また如何にして,「会社」なる語の一方的普及を一貫して推し進め，せっかく成立した，そして共同出資の営利企業を指すのには明らかにヨリ適切な語である「商社」を一貫して排斥したのか。字義から言えば,「商社」は共同出資の営利企業一般を指す語として商法に規定されても不思議はなかった。ところが実際には「商社」は法律用語となら

ず，日常語としても「会社」のうちの専ら商業それも貿易を営む企業に限定されてしまった。こうした捻じれは，誰々が，何故，いかなる状況のもとで，齎したのか。ここは明治期のことだから，あるいは史料が得られるかも知れない。これまで発掘されなかったのは，研究者がいわば俗説の「会社」渋沢創案説に安住し，穂積が折角指摘した，福地『会社弁』の「小引」さえまともに問題にしなかったせいではなかろうか。

シロウトの最大の弱点は，研究史に疎いことである。もし，この種の研究が専門家の手で果たされていれば，私ごときが手間暇かけるまでもない。ところが，これまでのところ，平井規之氏が教えてくれた，斎藤毅『明治のことば』以外には，「会社」なる語の由来についてはきちんとした研究が見当たらない。斎藤のものはそうとうなレヴェルに達していると言えるが，それでも細かい点では割りに多数のケアレスミステイクがあり，また「会社」は主題にしていても「商社」を本格的に扱っていないため，蘭学者が営利企業ではない「会社」を創案し，実務官僚がこれと独立に営利企業としての「商社」を創案し，維新政府が「会社」を換骨奪胎して営利企業を指す語にしたという，語の歴史における弁証法の発見には至っていない。

これ以外となると，寡聞にして，語の歴史を扱った文献自体を知らない。十分な探索を経ているわけではないが，経済史畑には見出せなかった。蘭学史については全くのシロウトだが，『日蘭学会会誌』と杉本つとむ氏の『江戸時代蘭語学の成立とその展開』[18]，『江戸時代翻訳語日本語辞典』[19]，および『杉本つとむ著作選集』にはひととおり当たってみたものの，「会社」，「商社」の成立史の手掛かりは見出せなかった。研究史に疎いために先行研究が見出せず，一方で大きな不安が残る。が，他方で，記述の拙文で独創性を誇り得るとシロウトの自惚れを引き起こすもとにもなる。この辺り，視野の広い歴史家諸氏のご教示を得たいところである。

註

1）＊馬場宏二「会社と社員」（大東文化大学経営研究所編『日本企業の建前と実態』）1999年1月。
　＊馬場宏二「福沢諭吉の会社論」（大東文化大学『経済論集』73号）1998年10月。
　＊馬場宏二『「会社」の探究』（大東文化大学経営研究所リサーチペーパーＪ-31）1999年12月。
2）『国書総目録』，国会図書館『希本あれこれ』(1994年　出版ニュース社)，講談社『オランダ語辞典』457ページの囲み記事による。
3）書誌学的概況は日蘭学会編『江戸幕府旧蔵蘭書目録』1980年で知り得る。
4）前掲『「会社」の探究』８ページ。
5）*Nederlandsch Magazijn* 1835（東京国立博物館本）p.281,vs『度日閑言』巻十六ノ十六。
6）前掲『「会社」の探究』29ページ，註（41)。
7）前掲書10ページ。
8）*Nederlandsch Magazijn*, 1835, p. 279.
9）*Nieuw Nederlandsch Magazijn,* 1846, p. 146.
10）*Nederlandsch Magazijn,* 1835, p. 86～87.
11）前掲『「会社」の探究』執筆の際には，CompagnieとMaatschappij, Genootschap の使い方には注意していたが，Handelmaatschappijなる用語があることに全く気付かなかった。
12）石井孝『幕末開港期経済史研究』（1987年　有燐堂）368～369ページ。

13) 『外務省引継文書』東京大学史料編纂所本。

14) 蘭和辞典の成立については，杉本つとむ「蘭日対訳辞典の研究」(杉本つとむ著作選集第七巻『辞書・辞典の研究Ⅱ』1999年，八坂書房，第八章，401～478ページ）が極めて詳しい。『波留麻和解』の成立については，『国書人名辞典』中の「海上随鴎（稲村三伯)」の項でも解かるが，石井恒右衛門が出て来ず，桂川甫周（国瑞）が加わったことになっている。

15) 前掲杉本つとむ「蘭日対訳辞典の研究」による。ヨリ簡単には，岩波文庫『蘭学事始め』132ページの編者註で解かるが，『和蘭字彙』の校訂者を桂川四代目甫周（国瑞）としている。これは七代目甫周（国興）でなければ時代が合わない。

16) 岩波文庫，福沢諭吉『福翁自伝』85～86ページ。

17) 前掲『「会社」の探究』9ページ。

18) 杉本つとむ『江戸時代蘭語学の成立とその展開Ⅰ～Ⅴ』1976～1982。

19) 杉本つとむ『江戸時代翻訳日本語辞典』(この本は『英和対訳袖珍辞書』を含む)

(2000年3月14日～4月8日)

〔追記〕その後，handelmaatschappijと「商社」の強い関連を示す史料を見出し得た。次稿「商社･会社･社員」でそれを取り上げる予定である。 (9月20日)